

## 「ベニスの商人」における秩序と暴力

柴 田 正 樹

(人文学部英文学研究室)

### Order and Violence in *The Merchant of Venice*

Masaki SHIBATA

(Department of English)

契約の期日までに借金を返せなかったアントニオをシャイロックが起訴してから、ヴェニスには奇妙な事態に陥った。ユダヤ人の金貸しが要求するのはアントニオの胸の肉1ポンドを切り取ることで、早い話がヴェニス一の商人を殺害することである。自ら羊や牛や山羊の肉ほどにも役に立たないと言う人肉を要求するなど、シャイロックが悪意の固まりと化していることは間違いない。が、ヴェニスの司法を困惑させたのは、彼の要求が証文で契約した通りのもので、法的には一点の非の打ち所がないということである。それどころか法を徹底して遵守するなら、まさしくシャイロックの請求通り、アントニオを殺さなければならないのだ。こうして法の規定に忠実であればあるほど、アントニオに対して残忍な判決を下さなければならないという奇怪な状況が発生したのである。このことは、例えば、彼の胸の肉を切り取る直前のシャイロックとポーシャのやりとりで典型的に見て取れるだろう

*Por.* Have by some surgeon Shylock on your charge,  
To stop his wounds, lest he do bleed to death.

*Shy.* Is it so nominated in the bond?

*Por.* It is not so express'd, but what of that?  
'Twere good you do so much for charity.

*Shy.* I cannot find it, 'tis not in the bond.<sup>1)</sup>

(IV. i. 253-258)

我々は法は秩序のためであると普通考えている。その本質は正義とか公平と言ったものにあると思っている。けれどもここでは法はシャイロックの非道の振舞を支持し、助長しているのではないだろうか。すなわち法はその本質と考えられているものとは正反対の暴力的な力と化したのである。

『ヴェニスの商人』第4幕第1場、法廷の場面に展開される残忍さは、それ故、偏にシャイロックの人間性に還元するわけには行かない。そこには暴力と化した法という一見不可解なものも認めなければならないだろう。しかし法が暴力化するとは一体どういうことなのだろう。法は暴力を内在させているのだろうか。だとすれば、法のどこにそれは存在するのだろうか。この法と秩序の本質に係わるはなはだ不気味な問題について考えるには、3千ダカットの抵当にアントニオの胸の肉1ポンドを規定した例の証文が最も良い手掛かりになる。

シャイロックは金が返せなければ人肉をいただくと言う。つまり金と人肉は交換関係に置かれている。契約という観念に慣れた目には、この関係を規定するシャイロックの証文に何ら奇異な点は見い出さないかもしれない。けれども一体如何にすれば金属片に過ぎない金と人肉は交換可能、すなわち等価になるのだろうか。両者は本質的に異なったものであり、いかなる意味においても同じ

ではない。3千ダカットと交換関係に置くことができるのは3千ダカットだけのはずである。しかしながら証文はこの不可能な交換を可能にしているのだ。この時証文はある種の理不尽な力でもって金と人肉の本質的な差異を消し去り、両者を無根拠にも等価物に仕立て上げているのである。そしてこの理不尽な力が暴力的なものであることは、交換関係に置かれたものの不等価性と異質性が大きくなればなるほど明瞭になるに違いない。

第4幕、法廷の場面でシェイクスピアが開示して見せるのは、証文の持つこの奇怪な性格である。シャイロックは慈悲を施すことも、元金の何倍もの金を受け取ることも拒否し、ひたすら証文通りを要求する。証文の関係を規定する力は普段は我々の注意を逃れているが、アントニオを危地に追いやるためにユダヤ人が艇のように利用する時、その存在をはっきりと我々に感得させるだろう。またシャイロックが法の規定に忠実であるということは、彼を通じて法の性格を表現することを可能にした。あくまで胸の肉を要求する金貸しのグロテスクさは、同時に、金と人肉の交換を規定する法のグロテスクさでもある。さらに、人間の命という交換の対象から最もかけ離れたものを交換関係に置くことで、不等価ないし異質のものを無根拠に関係付ける法の暴力性をますます顕在化させることになったのである。

交換とは元々は何の繋がりも持たないもの同士の間に関係を設けることである。それは必然的にシステムを生むことにもなる。例えば商業取引において交換が拡大し、関係化が進めば、商品世界という物のシステムができるだろう。そして交換を保証し、システムを維持しているのが法である。法は関係を形成するためのルールのことだと言っている。当然のことだが、法は物の間だけでなく、人間の間にも関係を設ける。証文であれば、取引の当事者間に債務者と債権者の関係を設けるといったように、法は人々に様々な役割と責務を与え、関係を張り巡らし、社会という複雑なシステムを形作るのである。しかも物を関係付ける時に見られた暴力性は、人の関係化の際にも伴う。法や規則に違反した時に与えられる罰はこの暴力の具体的な形と見ることができる。恐らく証文を表す“bond”が“bind”「結び付ける」ことに本来的な意義を持つのはこの法の性格を反映したものだだろう。関係付けるとは物や人を比喩的に結ぶことだからである。さらに“bond”は、「鎖」「手錠」「監禁」といった「拘束」を表す一群の意味を持つ。結び付けること、つまり関係付け、システムを形成するとは、決して自然的なものではなく、暴力的な力による営みであることがここにも示唆されているのではないだろうか<sup>2)</sup>。アントニオはそれを身を持って味わうことになったわけである。

関係規定の暴力性に着目する時、シャイロックが金貸しであるという事実は意義深い。それは元金に対して元金プラス利息を取るという不等価性によって、関係付けの暴力を最も顕に示すものだからである。もちろん商売は全て交換の原理の上に立ち、暴力性を秘めていると言える。結局のところ商人とは安く買い、高く売ることによって儲けを得ているのだから。ただ金貸しは、その取引の形態において、交換関係が不等価のものの中に結ばれているという暴力的事実を余りにも露骨に示すが故に他の商売とは区別され得る。が、これは逆に言えば、金貸しの形態は関係付けの本質を最も良く表しているということである。それこそヴェニス商人社会を基礎付けている交換原理の真の姿なのだと言っているだろう。法廷において証文の暴力的性格を反復するシャイロックは、高利貸しであることによってさらに証文の関係付けの本質をも体現する。いや、第2幕第5場、パッサーニオの招待に応じて外出する時は家を「閉ざし」、娘のジュシカをその中に「監禁」し、“Fast bind, fast find” (II. v. 53) をモットーとするシャイロック“Shy-lock”は、まさに証文“bond”という言葉そのままではないだろうか。“I stand for judgment” (IV. i. 103) とか“I stand here for law” (IV. i. 142) といった法廷での彼の高らかな叫びを「私は裁きを要求する」とだけでなく「私は法を象徴する存在である」と読むこともあながち無理なことではあるまい。シャイロックはヴェニス社会の秩序であり、根拠そのものなのである。

この関係付けの暴力的な力は欲望と密接な繋がりを持つ。関係を形成する作用はその関係を望む欲望に根差しているからである。商人の証文が規定する関係は利益に対する欲望に基づいている。ポーシャにとって亡き父の遺志“will”は従わねばならない「法」であるけれども、同時にそれは、娘の婿は箱選びで決めたいという父の欲望“will”でもあるだろう。シャイロックの証文は第1幕第3場では冗談で取り交わされたように見えるが、その背後にあるのはやはり欲望である。そのことは第4幕第1場、彼が、アントニオの肉を取るという得にもならない訴訟をやり通そうとするのは、彼に深い憎しみを感じ、嫌でたまらないからだとはばかりことなく広言する場面で明らかになるだろう。すなわち、借金の抵当に胸の肉を取るという途方もない証文は、実は、日頃アントニオに足蹴にされ、唾を吐き掛けられているユダヤ人の復讐という欲望に根差しているのである。

この欲望というものは限りが無いものであるから、関係を形成する暴力も本来は際限無く拡大する性質のものと考えられる。この力を無限定に放置すれば、もちろん暴力状態が生じるだろう。けれども証文が法として効力を持ち得るのは、それがこの力を制限もしているからである。例えば利益に対する欲望には限りがないが、証文においてある取引関係が規定された段階で、暴力＝欲望はそれ以上の拡大を阻止されることにもなる。規定された以上の利益は取れないのである。もしもその段階以上に欲望を満足させたければ、新たに別の関係を規定しなければならない。すなわち、証文は暴力＝欲望の力をその本質とするけれども、それを自ら制限する時、初めて成立するものなのだ。関係付けるとは暴力＝欲望の発現であり、その抑制でもある。関係の規定において他者も自らも拘束するという境界性が証文“bond”の秩序の側面である。従って証文には暴力と秩序が背中合わせに存在していることになる。

しかし暴力は秩序のもう一面であるにもかかわらず、表面化させては決してならないものであった。それは社会の表層に成立している秩序そのものを崩壊させかねないからである。それ故秩序を維持するためには、その本質である暴力的性格は絶えず隠蔽されねばならない。金貸しがこの劇において憎悪の対象とされ、また歴史的にも「金が金を生む」という反自然的な生殖行為に喩えられ禁忌の対象とされてきたのは、それが明かすことを禁じられた秩序の本質を暴露してしまっているからではないだろうか。もちろん、金貸しの欲望も証文によって境界付けられているのだが、欲望がその対象に掴みかかる構造、すなわち、暴力＝欲望の発露は他の商業形態（交換形態）と比べると遥かに直接的なものだからである。アーデン版の脚注によると高利貸しは金を貸す時、その金を他の金貸しから借りる振りをしたという<sup>3)</sup>。シャイロックも直接アントニオに3千ダカットを貸すのではなく、仲間のチューバルから借りる振りをしているが、これは金貸し自身も己の忌まわしさに気が付いていて、その不等価交換の形態を少しでもほかそうとする試みであったに違いない。

交換関係を規定する力はまがまがしい力であり、共同体の内部で交換を行うことはそこに暴力を発生させ、秩序を破壊させかねない危険な行為であった。アントニオが友からは利息は取らぬと

when did friendship take

A breed for barren metal of his friend?

(I .iii.128-129)

と言うのはこのためである。けれども商業の都市ヴェニス、つまり交換関係を基盤にする社会は交換をせずに存続は不可能だ。ここに秩序を損なうことなく交換を行わなければならないという矛盾が生じる。しかしこれは一つには暴力を共同体の外に向けることで解決し得るだろう。旧約聖書の『申命記』は兄弟から利息を取ることは禁じているが、他国の人からは良いとしている<sup>4)</sup>。これならば危険な力は外部に向けられ、共同体の秩序は乱されずに済む。聖書は交換の原理の上に立つ限り共同体が抱えざるを得ない矛盾を解く一つの方策を提示しているのである。

アントニオやバッサニアから商人たちは向こう見ずで享樂のとさえ評されるけれども、彼等の生

活様式は実はこのような暴力の回避という観点から捉えられるべきものである。つまり交換性を隠蔽・否定し、共同体の中に暴力を発生させないための努力と見るべきである。それは例えば友のためなら何物をも惜しまぬという態度に最も顕著に現れているだろう。バッサーニオは貧乏であるにもかかわらず、シャイロックの許を逃げ出したラーンスロットを召使としてさっそく雇ってやるし、グラシアノが頼みがあると言うと、その内容も聞かずに「よしきた」と請け合う。アントニオはバッサーニオの為なら全財産を投げ出し、死も厭わない。金を貸す時は無利子である。このように取引することなく無条件に与えるという行為は交換の原理を挫折させるものであろう。

商売に関しても、聖書の教える通り外国と交易するだけでなく、交換の暴力を抑えるためにさらに工夫を凝らしている。それは交換形態の中に賭けの要素を持ち込むという工夫である。第1幕第3場、シャイロックはヤコブが如何にラバンから羊を手に入れたかという旧約聖書の話をする。縞とぶちの子羊は自分のものとするという約束を結んだヤコブは、牝羊が発情すると小枝の皮を剥いでその目の前に突き立てた。するとぶちばかりの子羊が生まれ、残らずヤコブの取り分となったという話である。これに対しアントニオは

This was a venture sir that Jacob serv'd for,  
A thing not in his power to bring to pass,  
But sway'd and fashion'd by the hand of heaven.  
Was this inserted to make interest good?

(I .iii.86-89)

と答える。彼は、ヤコブは利益を手に入れたが、それは“venture”であってシャイロックの営む“usury”とは違うと言う。この違いは何よりもヤコブの利殖行為は自分の力でコントロールして行われたものではないという点に求められるだろう。つまりアントニオの視点では、利益が手に入ったのは天の配剤であって交換によるのではないのだ<sup>5)</sup>。同様に、劇の冒頭でサリーリオとサレーニオによって強調されるような危険を伴う船旅の結果得られるアントニオの交易の利益は天の恵みであって、シャイロックの利子とは異なる。己と交換関係の対象の間に何らかの障害を見出すことで、交換の関係を否定してしまうのである。

バッサーニオが黄金の羊毛に喩えられるポーシャという利潤を獲得する時も、アントニオの交易と同様、やはり危険な賭けをしなければならない。すなわち箱選びである。この賭博性は最初に箱選びに挑戦するモロッコによって明らかにされる。

If Hercules and Lichas play at dice  
Which is the better man, the greater throw  
May turn by fortune from the weaker hand:  
So is Alcides beaten by his rage,  
And so may I, blind Fortune leading me,  
Miss that which one unworthier may attain,  
And die with grieving.

(II . i .32-38)

箱選びに際して、もしも失敗した場合は以後二度と求婚してはならないという条件があるのはこの賭博性をさらに強めることになるだろう。危険が大きければ大きい程、手に入った利益は天からの賜り物という格好がつくのである。しかもポーシャの似姿の入った銅の箱に刻まれた言葉が

“Who chooseth me, must give and hazard all he hath.” (II .vii. 9)

であるというのは面白い。交換を否定し、無条件で与えるという態度は箱選びに勝つ秘訣でもある

のだ。銅の箱の文句を読んでモロッコは

Must give, -for what? for lead, hazard for lead!

This casket threatens-men that hazard all

Do it in hope of fair advantage ...

(II.vii.17-19)

と言うが、これはまさに避けねばならない交換の思想である。“Who chooseth me shall get as much as he deserves”と書いてある銅の箱を選び“I will assume desert”(II.ix.51)と言ったアラゴンも不十分だった。全てを失うことを覚悟し、また喜んでそうしなければベルモントで成功は掴めないのである。グラシアノとネリッサの結婚も、バッサーニオが運良くポーシャを手に入れたらという賭け的条件があった。

もちろん彼等を利益へ、また利潤に喩えられる女性へと向かわせるものは欲望である。シャイロックが利子に対して抱くのと同じ、果てしなく広がる欲望である。ジェシカと駆け落ちしようとするロレンツォを待ちながら恋する者の心情を語るサリーリオとグラシアノの言葉ほどこのことを良く表すものはないだろう。

Sal. O ten times faster Venus' pigeons fly

To seal love's bonds new-made, than they are wont

To keep obliged faith unforfeited!

Gra. That ever holds: who riseth from a feast

With that keen appetite that he sits down?

Where is the horse that doth untread again

His tedious measures with the unbated fire

That he did pace them first? -all things that are,

Are with more spirit chased than enjoy'd.

How like a younger or a prodigal

The scarfed bark puts from her native bay-

Hugg'd and embraced by the strumpet wind!

How like the prodigal doth she return

With over-weather'd ribs and ragged sails-

Lean, rent, and beggar'd by the strumpet wind!

(II.vi.5-19)

ロレンツォに限らず、ほとんど全ての人物が境界を越えて際限無く拡大する欲望に突き動かされている。彼等が最初「閉ざされている」という意識を抱いていることは注意すべきだ。バッサーニオは破産した己の状態を“gag'd”(I.i.130)と表現し、ポーシャは父の遺志によって自分では自由に婿を選べないことを“bars”とか“scanted”とか“hedg'd”といった動詞を使って表現している(II.i.15-18)。また彼女の似姿は箱の中に“lock'd”(III.ii.40)されているし、アントニオはシャイロックとの契約で“bound”(I.iii.4)の状態にあり、ジェシカはすでに述べたように家の中に閉じ込められている。物語は彼等がこの閉ざされた状況を抜け出し、自由な動きを獲得し、望みを実現するという方向に進む。これは明らかに“bond”の境界を越えて行こうとする欲望の物語であり、それ故、彼等が人や物に対する好悪を忌憚なく語ったり、欲望をしばしば話題とするのは極めて当然と言えるだろう。つまり欲望が活動の動機になっているという点では、シャイロックと彼等の間に何ら違いはない。しかし、一方は欲望の対象に直接掴みかかり、他方は賭けの要素の導入によってその構図をぼかす。これは商人たちにとっては重要な違いである。前者は暴力=欲

望を露骨に表面化するものであり、後者はそれを抑圧し、表層の秩序を維持しようとするからである。

アントニオらの態度は“bond”のいま一つの意味群を想起させる。それは「結束」「協定」「盟約」といった「絆」を表す意味群である。彼等は「絆」に大きな価値を置き、「拘束」を否定しようとするのだ。けれどもシャイロックはこの態度が欺瞞に満ちたものであることを暴いていく。彼は、「絆」と言えども一つの関係であり、そこに暴力性は否定し得ない、結局は「絆」も「拘束」も同じ“bond”ではないか、と言うのだ<sup>6)</sup>。これがベニスの危機である。

まずシャイロックはアントニオの交易が、いくら賭けの要素を導入したところで、根本的にはやはり交換の形態であることを示唆する。アントニオに、ヤコブは利息を取ったかと質問されてシャイロックは

No, not take interest, not as you would say

Directly interest, ...

(I .iii.71-72)

と答える。“not ... directly”という言い方には、アントニオの考え方に対するシャイロックの皮肉な視線が感じられるだろう。つまりアントニオらが天の恵みと見做す利益は、シャイロックにとっては間接的に取得された利子に過ぎないのである<sup>7)</sup>。また、友に惜しみなく与えるという寛大さは、その財源を生む奴隷制度に背後から支えられていることを忘れてはならない。人に慈悲を施さねば神からの慈悲は得られまいと言う公爵に対してシャイロックは

You have among you many a purchas'd slave,  
Which (like your asses, and your dogs and mules)  
You use in abject and in slavish parts,  
Because you bought them, -shall I say to you,  
Let them be free, marry them to your heirs?  
Why sweat they under burthens? let their beds  
Be made as soft as yours, and let their palates  
Be season'd with such viands? you will answer  
“The slaves are ours,” -so do I answer you;  
The pound of flesh which I demand of him  
Is dearly bought, 'tis mine and I will have it ...

(IV .i .90-100)

と答えるが、これには誰も反論できない。結局ヴェニスの社会の根底にあるのは奴隷“bond-man”(I .iii.118)であり、商人たちが目指す盟友関係も、その理念とは逆の制度を基盤に据えなければ成立しないのである。そしてヴェニスにとって不可欠と暗黙のうちに認められている奴隷制度に対しては、人々は、それが彼等の忌避する暴力の発現であっても、見て見ぬ振りをするか、偽りの正当性を与えて秩序の見せかけの元にそれを糊塗する他ないのだ。パッサーニオが求婚の資金を手に入れるためには結局シャイロックの証文に頼らざるを得なかったように、ヴェニスと“bond”は実は切り離せない関係にあると言える。

だがシャイロックが暴くヴェニスの最大の欺瞞は、彼をヴェニスという共同体の外部に追いやろうとする商人たちの排他的な態度にあるだろう。ヴェニスの商人たちは事あるごとに彼を「犬」呼ばわりし、異教徒ユダヤ人として差別する。まるで彼を共同体からも、人間からも弾き出そうとするかのように。けれどもシャイロックこそ法と交換原理を体現するヴェニスの社会の根柢そのものとも言える存在なのである。すでに述べたように秩序が秩序として成立するためにはその本質であ

る暴力的性格は隠蔽しなければならない。ところがシャイロックはその本質に近づきすぎていて、と言うより、ほとんど本質そのものであって、その暴力性はとても隠しきることができないのである。この時秩序はその暴力性をあたかも自分とは別物であるかの如く他者化する。秩序の本質であるにもかかわらず、秩序の外部のものとして排斥し、秩序の見せかけを守るのである。商人たちのシャイロック差別は、いわば、秩序が自家中毒を起こし解体するのを防ぐ防衛機構の作用なのだと書いていい。が、すでに明らかのように、シャイロックは外部と言っても、共同体の内部から産出された外部なのだ。それ故、彼はヴェニスの人々との同一性を主張する<sup>8)</sup>。

Hath not a Jew eyes? hath not a Jew hands, organs, dimensions, senses,  
affections, passions? fed with the same food, hurt with the same weapons, subject to  
the same diseases, healed by the same means, warmed and cooled by the same winter  
and summer as a Christian is? (III. i. 52-58)

そしてこの同一性の主張は法廷における

If you deny me, fie upon your law!  
There is no force in the decrees of Venice .... (IV. i. 101-102)

という叫びに極まるだろう。シャイロックは自分を否定できるものならやってみろと挑発している。だが、そうすることは自分たち自身を否定することになるのだぞ、と抜き差しならない問題を突きつけているのである。

シャイロックの論理は、利息を生み、商業を成立させ、奴隷制度というヴェニスの根底を支える拘束の論理である。そしてそれがまさに秩序の論理であるという点に、証文によるアントニオの拘束を簡単に否定できない理由が存する。シャイロックは証文通りを要求することで自ら法の暴力と化し、復讐という欲望の固まりとなって、秩序の内部矛盾をさらけだしてしまった。しかもこの暴力＝欲望は殆ど非限定的なものだ。一応、証文においてアントニオの胸の肉1ポンドが境界として定められているのだが、しかしこれは事実上アントニオの殺害であり、暴力を無際限に発揮させるに等しい。かつ、ユダヤ人のキリスト教徒に対する復讐の欲望を全的に肯定したに等しい。証文は境界付けの機能を果たしておらず、シャイロックをこのまま容認することは、ヴェニスに秩序以前のカオスの状態に陥ることを意味しているのである。

ポーシャの裁判はこの境界を失った暴力＝欲望を再び秩序化する作業である。奇妙なことで、またさぶる当然のことでもあるが、この時彼女が利用するのはシャイロックが使ったのと同じ論理だった。秩序化のための論理とは、すなわち拘束の論理に他ならない。血を流すことは認められぬ、正確に1ポンドを切り取れという、証文の文面を字義通りに取るポーシャの解釈は、証文の境界付けの機能を復活させ、暴走するシャイロックの欲望にたがをはめる為のものなのだ。彼女はシャイロックに言う。

Thou shalt have justice more than thou desir'st. (IV. i. 312)

ポーシャは、M. プラウマンの指摘するように、シャイロックの論理をそのまま彼に投げ返したのである<sup>9)</sup>。それは秩序を否定することなくシャイロックを否定しなければならないという、どうにもならないような状態を打開する巧妙な智略でもあった。

秩序を脅かす論理は秩序を形成する論理でもある。しかし注意しなければならないが、ポーシャの論理がシャイロックのと同じだということは、それが同様に暴力に満ち満ちたものであるということだ。秩序をはみだす力はもちろん暴力だが、それを押さえる力はそれを上回る暴力性を帯びて

いるのである。機知の利いた言葉遊びのように見える判決の背後には、こうした力と力の相克を見て取らなくてはならない。そしてその暴力性が最も良く現れているのがユダヤ人の財産没収とキリスト教への改宗強要だろう。財産没収はシャイロックの存在基盤を奪い、彼に「命を奪われたも同然」と言わしめる。つまり危険な本質を無力化するのである。また彼を改宗させキリスト教的価値観の世界に組み込むとは、暴力＝欲望を再び秩序の見せかけの下に覆い隠すことではないだろうか。裁判の場面におけるポーシャらの態度にはキリスト教の慈悲の精神が欠如していると良く指摘されるけれども、ここに描かれているのは超出した秩序の暴力的側面を力づくで封じ込む荒々しい隠蔽のメカニズムなのである。

ここでは秩序/無秩序を言った二項対立的区分はもはや立てることができない。いずれも暴力という力に還元されてしまうからである。そしてこの暴力性は、人間の社会が関係化によって作られる限り、そこに必然的に伴うものと言っていいだろう。

しかしだからといってこの劇の世界においても、シャイロックの去った後、やはり暴力を本質とする秩序が存続するののかという、そういうわけではない。劇の最後、第5幕に描かれているのは実は暴力が理想的なまでに排除されている世界なのだ。それを示すのがここに展開される指輪のエピソードである。判決を下した後、裁判官と書記の格好をしたポーシャとネリッサは裁判のお礼にと、それぞれバッサーニオとグラシアノから結婚指輪を取り上げる。そしてベルモントに戻ってから、指輪を渡してしまった夫の不実を責め立てた。この時アントニオはポーシャに向かって

I once did lend my body for his wealth,  
Which but for him that had your husband's ring  
Had quite miscarried. I dare be bound again,  
My soul upon the forfeit, that your lord  
Will never more break faith advisedly. (V. i .249-253)

と申し出る。これは一見“bond”の物語の再話のようである。しかしポーシャがネリッサとの企みを打ち明け、指輪を夫に返す時、“bond”の物語は冗談と化すだろう。指輪はその形の通り、人々の間をただ循環していたに過ぎないのである。ジュシカとロレンツォの会話の中にルネサンス期に典型的な調和の観念が見られる最後の場面に交換は存在しない。秩序の暴力性はシャイロックに代表させられ、彼が排除された時、暴力も世界から消えたのである。

第5幕では裁判のために延期されていた二組の男女の結婚生活が始まろうとしているが、この結婚というものも、人間関係から暴力が排除された状態を象徴するものだろう。結婚も確かに社会契約であり、関係規定の一つには違いないが、それは暴力的な力によってではなく、それこそ商人たちが理想とする「絆」の力によって成立するものだからである。浮気をするかどうか、さんざん脅かされたグラシアノは劇の末尾でこんなことを言う。

Well, while I live, I'll fear no other thing  
So sore, as keeping safe Nerissa's ring. (V. i .306-307)

しかしもちろん彼は喜びと満足を味わいながら、わざとこんなふうに嘆息してみせているのである。ここでも関係の規定は冗談の対象でしかないのだ。こうしてみると指輪というのは、一方で交換のない循環を表し、また一方で結婚という「絆」による関係を表し、第5幕の世界を象徴する優れたシンボルであるということが言えるだろう。

“bond”のまがまがしい意味が消え去ることで、場面はシャイロック“Shy-lock”から結婚“wed-lock”へと喜ばしくも転換する。無論、こんなことは現実にはあり得ないことなのかもしれない。あるいは



はこの至福はほんの束の間のことに過ぎないのかもしれない。現実の社会の秩序は、秩序化そのものに伴う暴力をそれこそ暴力的に、外部のものとして排出するという呪われたメカニズムによってしか自己同一性を保てないのかもしれない。しかし『ヴェニスの商人』は、ほんの一瞬のことであれ、その不可能事を作品に定着することで、世界が暴力から浄化されることを夢見た劇なのである。ユダヤ人の排斥は秩序内部から生まれる暴力を排除し、共同体の安寧を願う身代わりの山羊の儀式だった。その様を描いた『ヴェニスの商人』という劇は、社会から暴力そのものが除去されることを願った祭儀と言っていいただろう。

## 註

- 1) 引用は全て *The Arden Shakespeare: The Merchant of Venice*, ed. J. R. Brown (Methuen, 1984) による。
- 2) 法と“bond”の論理については拙論「「さまようこと」の意味—『間違いの喜劇』試論—」, *Osaka Literary Review*, Vol. XXVI (1987), pp. 40-52. も参照されたい。
- 3) J. R. Brown, ed., *The Merchant of Venice*, p. 24.
- 4) 『申命記』第23章第19節
- 5) C. L. Barber, *Shakespeare's Festive Comedy: A Study of Dramatic Form and its Relation to Social Custom* (Princeton: Princeton University Press, 1972), pp. 174-175.
- 6) 劇中、頻繁に用いられる“gentle/gentile”の地口も文化の中心としてのキリスト教的価値観とシャイロックの異教徒的、周縁的価値観の表裏一体性を表している。
- 7) Harold C. Goddard “The Three Caskets” *Shakespeare, The Merchant of Venice: A Casebook*, ed. John Wilders (London: Mcmillan, 1969), pp. 150-151.
- 8) Harold C. Goddard の前掲論文、及び Rene Girard “To Entrap the Wisest”, *William Shakespeare's The Merchant of Venice: Modern Critical Interpretations*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1986) も分身関係という言葉でアントニオとシャイロックの同一性を指摘している。
- 9) Max Plowman “Money and *The Merchant*”, *Shakespeare, The Merchant of Venice: A Casebook*, ed. John Wilders (London: Mcmillan, 1969), p. 79.

(平成元年10月5日受理)

(平成元年12月27日発行)

